

立命館大学校友会東北応援ツアー岩手県コース

「現地を訪問して思うこと」

土屋 亮 (2010年・文学部)

今回のツアーに参加して感じたこと、それは「隣接する自治体間における、復興スピードの格差」である。三陸地方はリアス海岸という地形上、トンネルを一つ隔てた向こう側に隣町があるといったロケーションであるが、ただ一つトンネルをくぐるだけで、復興の現状はこれほどまでに異なるのかと感じた。たとえば、釜石市前水産農林課長の佐野氏によれば、釜石市は震災後すぐに大阪から仮設住宅の建設業者を、神奈川から仮設トイレの業者を呼び、そしてこの夏には仮設住宅から恒久住宅への以降も予定しているという。いっぽうの大槌町では町長ほか自治体のトップが亡くなり音頭を取るリーダーが不在となり、釜石市に比べると復興へのスピード感の遅さは否めない。震災から1年8ヶ月が過ぎ、こうして「復興スピード」の格差が新たな問題として表面化している現実を目の当たりにすることとなった。

そして何より、今回のツアーで最も尊い経験だったのは被災地や全国の校友との出会いである。勉強会や交流会を通じ、たくさんの学びをさせてもらった。今後もこの縁を大切に、被災地への復興支援を続けていきたい。